

\*今年も桜の季節になりました。しかし、ウクライナはますますたいへんな状況です。皆様どのようにお過ごしでしょうか。

/// I N D E X //

- ISO 情報……………ISO14075(ソーシャル LCA)と ISO14068(カーボンニュートラリティ)の新しいワーキングドラフトができました。
- LCAF からお知らせ…賛助会員限定の PEF の LCIA 研究会を始めます。  
新年度の初級研修と中級研修の日程が決まりました。  
久しぶりに「何でも相談会@オンライン」を行います。  
2022年2月26日(土) LCA 中級検定試験を実施しました。
- 編集後記……………海外のクリティカルレビュー

■■ ISO 情報 ソーシャル LCA とカーボンニュートラリティ ■■

○ISO14075 (ソーシャル LCA)

この新しいワーキングドラフト (WD2) は、LCAF 通信 No.40 で報告しましたように、既存の二つのガイドラインの融合になっています。一つは“Guidelines for S-LCA of Products and Organizations 2020”というガイドラインを発行している国連環境プログラム(UNEP)のライフサイクルイニシアチブ(Life Cycle Initiative, UNEP)のグループ、もう一つが、“The Roundtable for Product Social Metrics(2018-2020)”というガイドラインを発行している民間企業のグループです。こちらには、ドイツの化学企業に勤務している TC207/SC5 の議長や私の古い付き合いである Simapro の開発者がいます。

新しいソーシャル LCA の規格は、「目的と調査範囲の設定」、「インベントリ分析」、「影響評価」並びに「解釈」という LCA の 4 つのフェーズに沿って行うことが決まっています。前者はもともと ISO の LCA を意識して作られているのでこの枠組みに合っているのですが、後者は、企業の活動を、たとえばコンプライアンスを遵守していることを平均点としてそれより良いか悪いかを 5 段階で評価する方法なので、これを影響評価(被害の評価)と言って良いかどうか、今後の議論です。

また、この両者とも企業の活動をインベントリとして扱うので、いわゆるバックグラウンドデータの所在が問題になります。影響(被害)を受ける対象の例として「労働者」や「近隣の社会」が取り上げられています。ソーシャルと言うと、アフリカでの児童労働などがすぐに思い浮かびますが、バックグラウンドデータが整備されないと、企業が直接に関与している「労働者」や「近隣の社会」だけを評価する方法にならざるを得ない状況と思います。

○ISO14068(カーボンニュートラリティ)

LCAF 通信 No.36 で書きましたが、この規格のカーボンニュートラリティの定義は、排出(Emission)と除去(Removal)が釣り合うことです。除去にはクレジットを購入する(オフセット)ことが含まれます。私は、少なくともトランジション(カーボンニュートラリティに行き着くまでの移行期)には、「Avoided Emission(削減貢献量)」の算定を認めることを主張してきましたが、「ダブルカウントがある、実質的には GHG 増大の可能性がある」という理由で、3月に送られてきた新しいワーキングドラフト(WG2)では削除されました。したがって、トランジションの間は、削減(Reduction)に努め、最後に残る排出をオフセットするというだけの規格になってしまいそうです。

これでは、革新的な技術開発をするインセンティブも働かないのではないかと心配になります。そう思う人が多いのでしょうか。IEC/TC111 では削減貢献量の算定方法の国際標準化の作業がはじまりました。電子・電気産業は、革新的技術開発による温室効果ガスの削減貢献を表現する方法を持つこととなります。

ISO14068(カーボンニュートラリティ)の規格を作る作業は、サイエンスベースドターゲット(SBTi)の影響が強くと表れていると思います。排出(Emission)と除去(Removal)が釣り合わなければカーボンニュートラルにならないというのはその通りなのですが、そこに行き着くまで

に、中小企業も含めて社会全体で進める方法を考えることが重要と思います。

## ■■ LCAF からのお知らせ ■■

○賛助会員限定の PEF の LCIA 研究会を実施します。

欧州委員会は 2013 年から 2018 年まで、製品と組織の LCA を実施する「Environmental Footprint (PEF: 環境フットプリント)」と称するプロジェクトを行いました。最近、バッテリー規制のように、この成果を政策に使う動きが活発になり、欧州企業からこれらのガイドラインを使って環境影響評価を実施することを求められる日本企業が増加しています。本研究会では、PEF の環境影響評価手法を理解し日本での実施を可能とすることを目的に、賛助会員の皆様及び産総研並びに大学での LCIA 研究者と共に PEF の LCIA を研究します。得られた成果のフィードバックを来年度に計画します。

○2022 年度の LCA の研修を以下のように実施します。

- ・初級研修：2022 年 4 月 27 日と 28 日午前
- ・中級研修：2022 年 5 月 25 日と 26 日午前

詳細は、<https://lcaf.or.jp/seminar.html> でご覧ください。

○しばらくお休みしていた「なんでも相談会」を 4 月 11 日(月)13:00-14:00 に行います。

以下からご参加ください。

<https://zoom.us/j/93373457598?pwd=RWRUeWhCOG0zTHQzLzNHbGdFY3c2UT09>

○2021 年度の中級検定試験を 2022 年 2 月 26 日(土)に実施しました。受験者は 16 名でした。合格率は約 70%でした。もうすぐ問題と解説をホームページで公開します。

## ■■ 編集後記 ■■

春ですね。我が家のサクランボは 3 月 10 日に、桃は 3 月 19 日、レンギョウも一昨日 3 月 21 日に開花しました。東京の桜の開花宣言は 3 月 20 日でした。去年より 4 日遅いとは言え、以前は 4 月の入学式頃に満開だったことを思うと、春が来るのが毎年早くなっているように思います。やはり温暖化の影響でしょう。

今、海外企業の LCA 報告書のクリティカルレビューを 2 件抱えています。これらに加えて、今回報告した ISO のワーキングドラフトへのコメント作成もあります。この年になってこんなに英語の仕事をしているとは若い時には思いもしませんでした。高校の時に進路指導の先生に、「これで英語の成績が良ければ。。。とため息をつかれたのを思い出します。

クリティカルレビューは少なくとも 3 人の委員で構成することが ISO/TS14071 で決まっています。欧州と米国と日本というジオグラフィカルバランスを満たすために私に依頼が来るようです。日本でもクリティカルレビューを実施する例が次第に増えてくるように思います。英語の LCA 報告書を読みクリティカルレビューを実施している経験が活きるようになって、頑張っています。

秋に球根を植えたチューリップとフリージアがもうすぐ咲きそうです。朝顔、ひまわり、オシロイバナの種をまかないといけません。「演習で学ぶ LCA」の書き換えを行っているのですが、新しい原稿を書いている時間がありません。いや、正直に言うと筆が運ばないので、庭仕事を理由に使っているだけです。連休前後までにはなんとかしたいものです。

(LCAF 理事長 稲葉 敦)

ご意見、ご感想、本メールマガジンの解除のご連絡はこちらまで  
[lcaf-contact@lcaf.or.jp](mailto:lcaf-contact@lcaf.or.jp)

一般社団法人 日本 LCA 推進機構

Japan Life Cycle Assessment Facilitation Centre (LCAF)

(エルカフと呼んで(読んで)ください)

〒71-0014 東京都豊島区池袋 2-36-1

インフィニティ池袋 8F52

電子メール: [lcaf-contact@lcaf.or.jp](mailto:lcaf-contact@lcaf.or.jp)

URL:<https://lcaf.or.jp/>